

Nirvikalpa-praveśa-dhāraṇī 二〇二

——無分別智と後得智の典拠として——

松 田 和 信

序

唯識三十論安慧釈において、無分別智と後得智の典拠として引用される Nirvikalpa-praveśa-dhāraṇī なる經典の一節について、この經典のチベット訳およびギルギット写本の中に現存している梵文断片との照合の結果を報告し、合わせて、この經典と初期瑜伽行派の諸文献との関連について考察する。なお梵文断片のローマ字転写を若干の校訂を加えて本稿の最後に付加する。

一

唯識三十論第二十～二十一偈において、世親は三性説を提示した後、第二十三偈において、三性の相関性を説

いている。その中、『それが見られない限り、彼は見られない』^①という第四句は、安慧によると、無分別智と後得智に結びつくものであるとされる。安慧は次のように説明する。^②

「『それが見られない限り』とは円成実性がであり、『彼は見られない』とは依他起性である。無分別出世間智によって見られるべき円成実性が見られない限り、通達されない限り、直証されない限り、依他起はそれ以外の智によっては把握されない。なぜなら、「依他起性は」その後には得られる清浄なる世間智によって理解されるものだからである。従って円成実が見られない限り、依他起は見られない。しかし、出世間智の後で得られる智によっては見られ

ないのではな^く。Nirvikalpa-praveśa-dharaṇīの中に説かれてゐる如し、『その後で得られた智によつて、一切法を幻術・陽炎・夢・影^⑤・こだま・水月・変化に等しいものと理解する』と。この場合の『一切法』とは依他起に収められるものであることが意図されている。一方、円成実は虚空の如くであり、

「それに対する」智は同一的(eka-rśa)である。[同じ經典に]『無分別智によつて、一切法を虚空に等しきものと見る』と説かれてゐる如くである。なぜなら「無分別智によつて」依他起なる諸法をただ真如にすぎないものとして見るからである。」

さらに無分別智と後得智に関する別の資料をあげよう。大乘莊嚴經論菩提品第十二偈は、転依にかんして、それが煩惱障と所知障との二障を断じて得られることを述べ、さらにその獲得が『清浄なる無分別智の道』と『広大な対象を有する智の道』を通して達成されることを説くが、この二つの智の道について安慧は次のように注釈している。^⑥

「極清浄なる無分別智の道を獲得し、その後で得られる無辺なる所知を対象とする清浄なる世間智の道を獲得することによつて、つまりこの二つの道によ

つて、二障を残りなく断ずるといふ意味である。この中、極清浄なる無分別智によつて一切法を虚空の如く空であると見る。その後で得られる無辺なる所知を対象とする清浄なる世間智によつて、三世に収められる一切の世界の事物を幻術・陽炎に等しいものと見る。」

以上に取り上げた二つの注釈の文章によると、安慧は無分別智と後得智に言及する場合に、Nirvikalpa-praveśa-dharaṇīなる經典の一節を援用しつつ、説を立てているのである。大乘莊嚴經論の注釈においては、この一節を直接引用はしていないが、三十論の注釈における引用と比較するなら、この一節を典拠としていることは明白である。なお三十論の注釈において、安慧は先に後得智の典拠となる文章を引用しているが、この經典のチベツト訳および他の文献における引用例より見ると、本来の形態としては、先に『無分別智によつて、一切法を虚空に等しきものと見る』という文章があつて、その後には後得智に関する一文が続いている。またこの一節は安慧以前の瑜伽行派の諸文献中に直接引用された形跡は確認できないが、安慧以後の文献では、カマラシーラの第三修習次第(3rd Bhāvāna-krama)の中で、円成実性を見る智

としての無分別智、および依他起性を見る智としての後得智といった問題とは無関係に引用され、またラナーカラシヤーンティの八千頌般若の注釈に於ける Saratama の中では、二種の般若波羅蜜（出世間智と世間智）の典拠として引用されている。以上の三つの引用例、およびこの經典のチベット訳の該当部分を比較すると、この經典の名称も含めて若干の相違点が見られる。次にその諸文献の文章を上げておく。

㉔) 三十論安慧釈の引用。

yathā Nirvikalpa-praveśāyām dhāraṇyām uktam/
nirvikalpena jñānenākāśa-samatālān sarva-dhar-
mān paśyati / tat-prīṣṭha-labdheṇa jñānena māyā-
marici-svapna-(pratibhāsa)-pratiśrutkodakaca-
nā-nirmīta-samān sarva-dharmān pratyeti //

㉕) 第三修習次第の引用。

tathā cōktaṁ Avikalpa-praveśe / lokottareṇa jñā-
nenākāśasamatālān sarva-dharmān paśyati / prī-
ṣṭha)-labdhena punar māyā-marici-svapnodaka-
candropamān paśyati //

㉖) Saratama の引用。

yathoktaṁ Dṛuṇa-avikalpa-praveśāyām dhāraṇyām

avikalpa-dhātu-pratiśṭhito bodhisatvo jñeya-nirvi-
śistena jñānena akāśa-samatālān sarva-dharmān
paśyati / tat-prīṣṭha-labdheṇa māyā-marici-svapna-
pratibhāsa-pratiśrutkā-pratibimbodakacandra-nir-
mīta-samān sarva-dharmān paśyati //

㉗) Nirvikalpa-praveśa-dhāraṇi への訳語部分。

byan chub sems dpañ sems dpañ chen po rnam
par mi rtog paḥi dbyins la rab tu gnas pas ni śes
bya dan khyad par med pa rnam par mi rtog paḥi
ye śes kyis chos thams cad nam mkhahi dkyil
dan mtshuis par mthon ho // rnam par mi rtogs
paḥi rjes las thob paḥi śes pas ni chos thams cad
sgyu ma dan / smig rgyu dan / rmi lam dan / mig
yor dan / brag cha dan / gzugs brñen dan / chu zla
dan / sprul pa dan / mtshuis par mthon ho //

㉘) この經典には漢訳もあるが杜撰な訳になっている。さなみにこの該当部分は次の如くである。

「若菩薩如是了知已如是安住無分別界。是即入無分別智與虚空等。」

以上の三つの引用例、およびチベット訳の間に

はそれぞれ他との相違があり、特に無分別智にかんする前半部分はそれが著しい。これらの中では、(c)がチベット訳該部分に最も近いが、それに較べると安慧の引用は簡素である。恐らく、安慧の引用したものを(c)・(d)へと増広して行ったと思われるが、いずれのものにしても、意味上の相違はなく、無分別智は出世間のものであり、一切法を虚空の如しと見る智、つまり円成実性を見る智として存在し、一方、後得智は世間的なものであり、一切法を幻術等の如しと見る智、つまり依他起性を見る智となるというのが、この *Nirvikalpa-praveśa-dharaṇi* ⑩の一節を援用しての安慧の説明である。

二

現在までのところ、無分別界に悟入するための過程を説くこの小経典(チベット訳でわずく六葉。名前に *dharaṇi* とあるが、いわゆる真言の類は一切説かれない)は、チベット訳と漢訳でしか知られず、梵文原典の存在することは確認されていなかった。ところがラグ・ヴィーラとローケーシユ・チャンドラ父子によって出版されたギルギット写本の写真集第七分冊に収められている *Avikalpa-praveśa-nāma-mahāyāna-sūtra* (写真番号一六

六八〜一六八一)がチベット訳との照合の結果この経典に一致することが判明した。この写本は最終葉(第十六葉)が残っているので全体で十六葉より成ることがわかるが、現存しているのはそのうちの七葉にすぎない。各葉両面に六ないし七行をもって書かれ、書体はギルギット写本の中で大乘系の典籍に特有な丸みを帯びたグプタ文字である。またサンディ等にかんして不規則な点が多いが、末尾の二偈を含めて俗語的要素はほとんど見られない。ところで、本稿で取り上げられている一節は、不完全ではあるが残された写本の中に含まれており、次のように読みうる。

avikalpa-dhātu-pratīṣṭhito bodhisatvo mahāsattvaḥ jñeya-ni(r) viśiṣṭena ni(r) vikalpena jñānena māyā-marīci-gaṇḍharva-nagara-svapna-pratibhāsa-bhīṣajānāyaka-ca(ndra)... (以下欠落)

これを見ると不思議なことに三十論安慧釈に引用されるもの等とは全く異った文章になっている。先に述べたように、本来この部分は無分別智と後得智にかんする二つの文章より成るはずであるが、ここでは中間の部分が抜け落ちており、後得智という語も現われない。これは写本のこの部分が混乱していて本来の形としては *jñānena*

と *maya*。以下の間にチベット訳および諸引用例にあるような文章が入るべきなのか、あるいはこの写本は別の系統のものであってこのままの形で首尾一貫しているのか、写本のこれにつづく部分が欠けているので断定はできないが、この写本の他の部分がチベット訳と驚くほど一致するのに比べると非常に奇妙なことのように思われる。また *gandharva-nagara* という語も、他の資料には全く現われず問題をより複雑にしているが、これだけの資料ではこの部分の本来の形について判断することはできず、我々はこれ以上の考察を中止せざるをえない。

III

ではこの經典は佛敎史上においてどのような位置を占めるものであろうか。安慧が無分別智と後得智の典拠とするぐらいであるから、初期瑜伽行派にとって重要視されたのかも知れない。事実我々はこの經典の中に次のような瑜伽行派に特有の表現を見出しうるのである。^⑧

viñaptimātram rūpani iti carati vikalpe carati/
yathā rūpani nāsīt tathā rūpa-pratibhāsā viñātir
api nāstīti carati vikalpe carati /
「色はただ了別にすぎない(唯識)と行ずる人は分

別について行ずるのである。色が存在しないのと同様に色として顕現する了別もまた存在しないと行ずる人は分別について行ずるのである。」^⑨

これは対象の無から識の有へ、識の有から識の無へという唯識説で説かれる「入無相方便」の思想である。^⑩

さらにこの經典が法法性分別論(*Dharma-dharmata-vibhaga*)の一節と結びつくと思われる点を指摘したい。まず本稿で取り上げているこの經典の一節はチベット訳とギルギット写本で見ると次のような一文に先立たれている。^⑪

kataraṃ ca tad avikalpaṃ / avikalpo 'rūpo 'nidar-
śano 'pratisiḥo 'nabhāso 'viñaptiko 'niketa itī /
「この無分別とは何か。無分別は無色・不可説・不住・不顯現・不了別・不所依である。」^⑫

この文章とそれにつづく無分別智・後得智を説く一節を念頭におく時、我々は法法性分別論の次のような一節に注意を引かれる。^⑬

lakṣaṇa-praveśas tribhīr ākāraih / dharmatā-
prati-
tīṣṭhānato 'dvaya-nirabhīlāpya-dharmatā-pratiṣ-
thānāt / asaṃprakhyānato dvaya-yathābhīlāpen=
diṛya-visaya-viñāpti-bhāṣāna-lokāsaṃprakhyānāt

/ tad anenārūpy anidarśanam apratiṣham anā-
bhāsam avijñaptikam aniketam iti nirvikalpasya
jñānasya yathā-sūtram lakṣaṇam abhidvyōtitaṃ
bhāvati / snan bahi phyir ni nam mkhahi dkyil
ltar chos thams cad mthon bahi phir dan / sgyu
ma la sogs pa ltar hdu byed thams cad mthon
bahi phyir ro /

「相への悟入は三つのことからである。(1)法性に住することから。つまり無二で言語表現を離れた法性に住することからである。(2)不顕現であることから。つまり二つのものとして、言語表現される如きものとして、根として、境として、了別として、器世間として顕現しないことからである。このことによつて『無色・不可説・不住・不顕現・不了別・不所依である。』と經典に説かれている如くの無分別智のその相が示されたことになる。(3)顕現することから。つまり一切法は虚空の如しと見ること、一切諸行は幻術等の如しと見ることからである。」

この一節は無分別智に悟入することに関する六項目の中、第四「相」(Taksana)についての説明であつて、この中(2)として和訳した部分は、無分別智の相に関して經典を

典拠として『二つのもの等としての不顕現』を説いているのであるが、その經典の引用として『無色・不可説ないし不所依である』という語句が見られる点、およびそれにづく(3)において一切法を虚空の如しと見ることと幻術等の如しと見ることとを説いている点からして、この一節と本稿で取り上げている Nirvikalpa-praveśa-dhāraṇī の一節(それに先立つ一文を含めて)とは、表現の順序と内容とにおいて全く一致すると言える。従つて、法性分別論に述べられる『經典に説かれている如くの無分別智の相』という場合の「經典」とはこの經典を指示していると考えられるのである。従来この部分は宝積經迦葉品の第五十六・五十七節が典拠とされていたのであるが、^⑩迦葉品のその部分は、言葉は一致するけれども、「中道」という点に関して『無色・不可説ないし不所依』と説いているのであつて、無分別智を説いていのではない。また語順の点からいっても、この部分は迦葉品より *Nirvikalpa-praveśa-dhāraṇī* の方が一致するのである。

以上のことだけでは、この經典が法性分別論に先行し、法性分別論がそれを典拠にしたということとは断定できないが(その逆もありうる)、しかし両者の間になんらかの結びつきがあることは確認できるのではな

ぶつが。

註

- ① Lévi 本 p. 40, l. 21.
 - ② *ibid.*, p. 40, l. 22~p. 41, l. 2.
 - ③ 上の「聲」(pratihāsa)の語は原文には現われなから Tib. (P. ed., No. 5565), Si. 198a-5 のよつて補へ。
 - ④ 原文 *ākāṣa-samatāyaṃ* や Tib. (*id.*) のよつて後に紹介する諸引用例のよつて *ākāṣa-samatāyaṃ* と訂正。
 - ⑤ Lévi 本 p. 35, l. 13~p. 36, l. 3. 参照。
 - ⑥ *Sūtrāṅkāra-vṛtti-dhāya* (P. ed., No. 5531) Mi. 128b-8~129a-3 のよつて西蔵文典研究会「安慧造『大乘莊嚴經論釈疏』菩提品(1)」『西蔵文獻による佛教思想研究』第一号 十九頁・三十九頁参照。この和訳した文は第十二偈の句 (tat-prāpīr nirvikalpā viśaya-samāhato jñāna-mārgāt susuddhāt//) を引つて解釈する部分にあつた。
- なお安慧は第十四章教授品第四十二偈に対する注釈におつて次のよつて述べてゐる。(ibid., 312b-7) *ye śeś gaig pa ni nman par mi rtog pa'i ye śeś te/ye śeś des thams cad nam mkhahi ran bshin du khoi du chud pas.....//*
- ⑦ この上げた文は本文中にも述べたよつて二つの文を正しく配列し直したものである。また注③④の訂正を取り込めば。
- ⑧ G. Tucci, *Minor Buddhist Texts*, part III (Roma, 1971) p. 11, l. 7~9.
 - ⑨ P. S. Jains, *Sāratama*, (Patna, 1979) p. 82, l. 20~23.

經名冒頭の *Drum* とどう語が何を意味するか理解できない。あるいは *Druma* の誤りか。

- ⑩ P. ed., No. 810, Nu. 3b-8~4a-2. 三十論安慧釈所引のこの部分をトランスしたのは S. Lévi が最初である。Matériaux pour l'étude du système Vijnaptimātra, (Paris, 1932) p. 117, note 1. を参照。なつてこのキヤット訳にちなんで經典名の原題は *Ārya-avikalpa-praveśa-nāma-dhāraṇī* である。
- ⑪ 佛説入無分別法門經。施護 (A. D. 980 入宋訳。大正 No. 654, vol. 15, p. 805~6. 以下引用 *ibid.*, p. 806a.
- ⑫ 前述の如くこの經典の名称については、後に説明するキリキット写本も含めて若干の相違があるが、本稿では一応安慧の引用する名称に従ふことにする。
- ⑬ *Gilgit Buddhist Manuscripts*, part 7, reproduced by Raghun Vira and Lokesh Chandra, (New Delhi, 1974)
- ⑭ 写真番号 1673 (8b) l. 4~7. 以下写本を引用する場合は写真番号 (カマコ内は葉数) で示すが、その全体については本稿末尾のローン字転写を参照された。
- ⑮ *ibid.*, No. 1676, (13a) l. 3~5, Tib. 5a-6~7.
- ⑯ 「入無相方便」に言及する論稿は多いが、次の論文のみを参考に上げておく。早島理「瑜伽行唯識学派における入無相方便相の思想」『印佛研』二十二卷二号、p. 1020~1011)
- ⑰ *op. cit.* No. 1673, (8b) l. 2~4, Tib. 3b-7~8. 若干の校訂を加えてもなおこの文章は文法的に不正確である。残りの部分は写本の形態を尊重し、そのまゝの形で上げてお

く。ローマ字転写末尾の注3を見よ。

⑩ Nozawa ed, p. 15. l. 11~18. 及び Appendix p. 49. l. 4~10. この部分は梵文が回収されている部分と重なるので、

その部分は梵文で示し、残りをチェック訳で示す。
⑪ 山口博士の和訳『山口益佛教学文集』(上)一九五頁、注十四を参照。

〔梵文断片ローマ字転写〕

以下にギルキット写本中に残されている梵文断片全文のローマ字転写を掲げる。写真集では No. 1668 より始まるが、これは出版者の誤りであり、No. 1670→1671→1668→1669→1672→とつづくべきである。なおサンディ等については写本に現われる形をそのまま残し、正規形には改めない。下線部分は本稿で引用した部分であることを示す。

*** folios 1a-5b missing***

[1670, 6a, Tib, 3a-3] -vikalpa-nimittam/bhūta-koty-animitta-paramārtha-dharmadhātu-nirūpaṇa-vikalpa-nimittam/yad²⁾ uta svalakṣaṇa-nirūpaṇato vā guṇa-nirūpaṇato vā sāra-nirūpaṇato vā/sa tāny api tatva-nirūpaṇa-vikalpa-nimitāny amanasikāratāḥ parivarjāyati/taśya tāny api parivarjāyato parāṇi [1671, 6b] prāpti-nirūpaṇa-vikalpa-nimitāni samudācaranty abhāsa-gamana-yogena/tad yathā prathama-bhūmi-prāpti-nirūpaṇa-vikalpa-nimittam/yāvad daśama-bhūmi-prāpti-nirūpaṇa-vikalpa-nimittam anupattika-dharma-kṣānti-prāpti-nirūpaṇa-vikalpa-nimittam vyākaraṇa-prāpti-nirūpaṇa-vikalpa-nimittam buddha-kṣetra-pa [1668, 7a, Tib, 3a-7] (rī)śuddhi-prāpti-nirūpaṇa-vikalpa-nimittam/satva-pa (rī) pāka-prāpti-nirūpaṇa-vikalpa-nimittam/abhiseka-prāpti-nirūpaṇa-vikalpa-nimittam/yāvad sarvajñatā-prāpti-nirūpaṇa-vikalpa-nimittam yad uta svalakṣaṇa-nirūpaṇato vā guṇa-nirūpaṇato vā sāra-nirūpaṇato vā sa tāny api prāpti-nirūpaṇa-vikalpa-nimitāny ama [1669, 7b] nasikāratāś parivarjāyati/evañ sa bodhisatvo mahāsatvaḥ sarvākāra-vikalpa-nimitāny amanasikāratāḥ parivarjāyan suvyuto bhavati avikalpena/na ca tāvad avikalpa-dhātum sparsāyati/asti (*) eṣa yoniśah-samādhīḥ avikalpa-dhātum sparsānāyati (*) (//) (sa) taśya samyak-prayogasya sevānānvayād bhāvanānvayād bahulīkaraṇānvayād samyān-manasikāraṇva [1672, 8a, Tib, 3b-4] yād a(na)bhisaṃskārād anābhogato vikalpa-dhātum spṛśati/kramena ca pariśodhayati/kena kāraṇenāvikalpa-dhātur avikalpa ity ucyate//sarva-vikalpa-nirūpaṇa-samatīkrāntatām upādāya/deśana-vidarśana-samatīkrāntatām upādāya/sarvendriya-vikalpa-samatīkrāntatām

upādāya/sarva- [1673, 8b] kleśopakleśāvaraṇa-nirālayatāṃ copādāya/tenocyate' vikalpa itī/kaṭarac ca tad avikalpaṃ/

avikalpo 'rūpo 'nidarśāno 'pratiṣṭho 'nābhāso 'vijñāpīko 'niketa itī/avikalpa-dhātu-pratiṣṭhito bodhisatvo mahāsatvaḥ

jñeya-ni(r) viśiṣṭena ni(r) vikalpena jñānena māyā-marīci-gaṇḍharva-nagara-svapna-pratibhāsa-bhṃbodakāca(n)dra.....

folios 9a-11b missing

[1674, 12a, Tib. 4b-7] (adhivā) canam (/) nānā-ratna-pra-(*lacuna**) itī prāpti-vikalpa-nimittāṃ etad a(dhi) vacana=
(m)/mahā-cintā-maṇi-ratna-nidhānasya pratilambha itī avikalpa-dhātu-sparśanāyā etad adhvacyaṃ/itī hi kuḷa=
putrā 'nenopamopanyāsena¹⁷ vikalpa-praveśo 'nugantavyaḥ (/) kathanṃ punaḥ kuḷaputrā bodhisatvo mahāsatvaḥ etāni

yathā ni(r) dīṣṭāni vikalpa-nimittāni vyaparapārī [1675, 12b] kṣamāno 'vikalpa-dhātunṃ pravīśati/evam avikalpa-dhātu-
pratiṣṭhito bodhisatvo mahāsatvo rūpaṃ itī āmukhibhūte evaṃ vyaparīkṣate yo mama rūpaṃ itī carati vikalpe carati/

parēṣāṃ rūpaṃ itī carati vikalpe carati (/) rūpaṃ utpadyate niruddhyate saṃkliśyate vyavadāyate itī carati vikalpe

carati/nāsti rūpaṃ itī carati vikalpe carati (/svabhāvatō'pi nāsti he) tuto'pi [1676, 13a, Tib. 5a-5] nāsti phalato'pi nāsti

karmato'pi nāsti yogato'pi nāsti vṛttito'pi nāsti rūpaṃ itī carati vikalpe carati (/) vijñāptimātraṃ rūpaṃ itī carati

vikalpe carati/yathā rūpaṃ nāsti tathā rūpa-pratibhāsā vijñāptir api nāstī carati vikalpe carati/yataś ca kuḷaputrā

bodhisatvo mahāsatvo rūpa-pra [1677, 13b] tibhāsāṃ api vijñāptiṃ nopalabhate/na ca sarveṇa sarvaṃ vijñāptim

vijñānāśayati/na cānyatra vijñāpeḥ kaṃcid dharmam upalabhate/tāṃ ca vijñāptim abhāvataḥ samanuṣāsyati/na

cānyatra vijñāper abhāvaṃ samanuṣāsyati/asyās ca rūpa-pratibhāsāyā vijñāper abhāvaṃ/taṃ vijñāpyā nalikatvena

samanuṣa(syati).....

folio 14a-b missing

[1678, 15a, Tib. 5b-5] ...vīrya-pā) ramiṭāyā dhyāna-pāramitāyāḥ prajñā-pāramitāyā evaṃ śūnyatādīnaṃ yāvāt sa(r) =

vākāra-jñātāyā yojyam//īha kuḷaputrā bodhisatvo mahāsatvaḥ sarvākāra-jñātā-nirūpeṇa-vikalpe āmukhibhūte evaṃ

vyaparīkṣate yo mama sarvā (kā) ra-jñāteti carati sa vikalpe carati/parēṣāṃ sarvā (kā) ra-jñāteti vikalpe carati/sar-

vākāra-jñātā i [1679, 15b] itī carati vikalpe carati/sarvākāra-jñātā prāpyata itī carati vikalpe carati/sarvākāra-jñātā

sarva-kleśa-jñeyāvarāṇa-prahāṇāyeti carati vikalpe carati/sarvākāra-jñatā²⁹⁾ evam hi kulaputrā bodhisatvo mahā-²⁸⁾
satvo vikalpa-dhātu-pratiśhīto bhavati/asya kulaputrā dharmo-paryāyasya udgrahana-lekhana-vācanād bahutaram
punyaṃ nanv eva gaṅgā-nadī[1680, 16a, Tib. 6b-2]-vālukopamātmabhāva-parityāgasya nanv eva gaṅgā-nadī-vāluco-³⁰⁾
pama-lokadhātu-paripūrṇa-rāna-dānasya nanv eva gaṅgā-nadī-vālukopama-lokadhātu-paripūrṇa-tathāgata-bhṃba-kā-³¹⁾
rāpama-puṇya-skandhasyeti//

atha khalu bhagavāms tasyāṃ velāyāṃ ime gāthe (abhā)ṣata//

avikalpa-nayo bhūtvā saddharṃe 'smiṃ ji(nāma)jaḥ (/)

[1681, 16b] vikalpa-mārgaṃ vyatītya kramāṃ niṣkalpam ā(pnoti//)

(praśā)ntam amalāṃ śreṣṭhaṃ vaśava(t)ti-samāsamaṃ/

avika(ṭpaṃ) sukhaṃ tasmād bodhisatvo 'dhigacchati//³⁴⁾

idam avocad bhagavān āttamanā Vimala-prabhāśas ca bodhisatvo mahāsatvaś ca sarvavātī parṣat sadeva-mānuṣāsura-³⁶⁾
gandharvaś ca loko bhagavato bhāṣitam abhayanandan//³⁷⁾
avikalpa-praveśaṃ nāma ma(hā)yāna-sūtra(ṇ) samāptam)

- 1, Ms salakṣaṇa. 2, Ms -ttāny api manasi-. 3, Ms prāpta-. 4, Ms -nimit्तāvi. 5, Ms śuddhī. 6, Ms overlapped.
 - 7, I cannot decipher this letter. 8, Ms -dhātumh. 9 Ms -nevanānvyād. 10, Ms -vikalpokadhā-. 11, Ms -riyamavika-.
 - 12, Ms tanacyate. 13, Ms 'vijñaptikam aniketa. 14, Ms jātana. 15, Ms parīci-. 16, Ms bhṃbadagaca-. 17, Ms kulaputra.
 - 18, Ms mahāsatva. 19, Ms overlapped. 20, Ms vyavadāyete. 21, Ms vikalpa. 22, Ms mahāsatva. 23, Ms vijñaptiḥ.
 - 24, Ms kaścid. 25, Ms -tāyād. 26, Ms vyojāṃ. 27, Ms nirūpaṇā-. 28, Ms sarvā-. 29, 4 syllables unreadable. 30,
 - Ms bāluco-. 31, Ms -kopapa-. 32, Ms 'siṃ. 33, Ms vyavītya. 34, Ms 'dhigācchati 35, Tib. nam par mi rtoḡ snai
 - ba. 36, Ms mahāsatvasā ca. 37, Ms samrāvāvatī. [補注] No. 1675~6 における svabhava, ないし, vītti の六語の概
- 念については, 高崎直道『法身の一元論』(『平川博士還曆記念論集』) pp. 231-6, 238 注 25, 袴谷憲昭「〈清淨法界〉考」
『南都仏教』No. 37) pp. 2-3 を参照。